

京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』翻刻・校注

—「第一」の翻刻と校注（二）—

水口幹記  
田中良明

天地瑞祥志第一

〇四、明分野

【概要】

先ず九州分土の来歴を述べ、次いで某人の説を引くが、それを否定して分野説の多様性を論じ、洛書・石氏・『漢書』天文志に載る分野説を引く。

01 ①

四明分野

夫分野者九州之田野也並仰繫上天矣故周禮曰保章氏以星土辨九州之地以觀祿祥也昔禹治之水土制九州而列五服也殷因於夏無所變改周既克殷而改禹徐梁二州合之於雍青（徐州以入青州梁州以合雍州也）分冀州之地以為幽并也

「一」「礼」に作る。

01 ②

四、明分野。

夫分野者、九州之田野也。並仰繫上天矣。故『周禮』曰、「保章氏、以星土辨九州之地、以觀祿祥。」也。昔、禹治之水土、制九州而列五服也。殷因於夏無所變改。周既克殷、而改禹徐・梁二州、合之於雍・青（徐州以入青州、梁州以合雍州也）、分冀州之地以為幽・并也。

01 ③

四、分野を明かにす。

夫れ分野なる者は、九州の田野なり。並に<sup>なほ</sup>仰ぎて上天に繫ぐなり。故に『周禮』に、「保章氏、星土を以て九州の地を辨じ、以て祿祥を觀る。」と曰ふなり。昔、禹<sup>こゝ</sup>之が水土を治め、九州を制して五服を列するなり。殷夏に因り變改する所無し。周既に殷に克ち、而して禹の徐・梁二州を改め、之を雍・青に合し（徐州以て青州に入れ、梁州以て雍州に合するなり）、冀州の地を分けて幽・并と爲すなり。

01④

(一) 『周禮』春官、保章氏

保章氏、掌天星、以志星辰日月之變動、以觀天下之遷、辨其吉凶。以星土辨九州之地、所封封域皆有分星、以觀妖祥。

(二) 『漢書』卷二十八上、地理志第八上

堯遭洪水、襄山襄陵、天下分絕爲十二州。使禹治之、水土既平、更制九州、列五服、任土作貢。……殷因於夏亡所變改。周既克殷、監於二代而損益之、定官分職、改禹徐、梁二州、合之於雍・青。分冀州之地、以爲幽・并。

(1) 顏師古注「省徐州以入青州、并梁州以合雍州。」

02①

今就分野之星鄭在河南豫州之域而屬東南角亢晉在河內冀州之域而屬西南參星者何乎言處官有功生則昨土命氏死則配食其神子孫世焉據左傳昭公元年曰昔高辛氏有二子伯曰閼伯季曰實沈俱居曠林不相能帝以爲不咸（帝謂堯也咸善也）遷閼伯于商丘祀辰（商丘宋地辰大火故以心爲商星也商者湯先也）遷實沈于大夏祀參（大夏今晉陽縣故以參爲晉星也）國語曰武王伐殷歲在鶉火歲之所在我有周之分野（守日時歲星在張十三度故曰鶉火也）又曰星在天元龜則我皇妣大姜之姪伯陵之後逢公之所憑神焉（守日時辰星與須女伏歷建星及牽牛至須女故天龜也逢公殷諸侯居齊地將死妖星出須女故所憑神也）故左傳曰鬼神歸人而行民爲神主也禍所受在祭主之國也

02②

今就分野之星、鄭在河南豫州之域、而屬東南角・亢、晉在河內冀州之域、而屬西南參星者、何乎。言、「處官有功、生則昨土命氏、死則配食其神、子孫世焉。據『左傳』昭公元年、曰『昔、高辛氏有二子。伯曰閼伯、季曰實沈。俱居曠林、不相能。帝以爲不咸（帝謂堯也。咸善也）。遷閼伯于商丘祀辰（商丘宋地。辰大火。故以心爲商星也。商者湯先也。）遷實沈于大夏祀參（大夏今晉陽縣。故以參爲晉星也。）』、『國語』曰『武王伐殷、歲在鶉火。歲之所在、我有周之分野。』（守曰、「時歲星在張十三度。故曰鶉火也。」）又、曰『星在天龜。則我皇妣大姜之姪、伯陵之後、逢公之所憑神焉。』（守曰、「時辰星與須女伏、歷建星及牽牛至須女。故天龜也。逢公殷諸侯、居齊地、將死妖星出須女。故所憑神也。」）故『左傳』曰『鬼神歸人而行民、爲神主也。』禍所受在祭主之國也。」

02③

今 就ち分野の星、鄭は河南豫州の域に在り、而るに東南角・亢に屬し、晉は河内冀州の域に在り、而るに西南參星に屬する者は、何ぞや。言へらく、「官に處り功有れば、生きては則ち土を胙い氏に命じ、死しては則ち其の神に配食し、子孫焉を世とす。『左傳』昭公元年に據らば、『昔、高辛氏に二子有り。伯を閼伯と曰ひ、季を實沈と曰う。俱に曠林に居り、相能くせず。帝以て臧からずと爲す（帝は堯を謂ふなり。臧は善なり。）』。閼伯を商丘に遷し辰を祀らしめ（商丘は宋の地。辰は大火なり。故に心を以て商星と

爲すなり。商なる者は湯の先なり。實沈を大夏に遷し參を祀らしむ（大夏は今の晉陽縣なり。故に參を以て晉星と爲すなり。）。と曰ひ、『國語』に、『武王殷を伐ちしとき、歲鶉火に在り。歳の在する所、我が有周の分野なり。』（守曰く、「時に歲星張の十三度に在り。故に鶉火と曰ふなり。」と。）と曰ひ、又、『星天竈に在り。則ち我が皇妣大姜の姪、伯陵の後、逢公の神に憑る所なり。』（守曰く、「時に辰星須女と伏すは、建星及び牽牛を歴て須女に至るなり。故に天竈なり。逢公は殷の諸侯、齊の地に居り、將に死せんとするに妖星須女に出づ。故に神に憑る所なり。」と。）と曰ふ。故に『左傳』に、『鬼神は人に歸して民に行はれ神主と爲るなり。』と曰ふ。禍受くる所は祭主の國に在るなり。」と。

## 02④

(一) 『春秋左氏傳』隱公八年

無駭卒。羽父請諡與族。公問族於衆仲。衆仲對曰、「天子建德。因生以賜姓。附之土而命之氏。諸侯以字爲諡。因以爲族。官有世功則有官族。邑亦如之。」公命以字爲展氏。

(二) 『續漢書』志第九、祭祀志下

大司農鄭玄說、古者官有大功、則配食其神。

(三) 『春秋左氏傳』昭公元年

晉侯有疾。鄭伯使公孫僑如晉聘、且問疾。叔向問焉曰、「寡君之疾病、卜人曰『實沈・臺駘爲祟。』史莫之知。敢問此何神也。」子產曰、「昔、高辛氏有二子。伯曰閼伯、季曰實沈。

居于曠林、不相能也。日尋干戈、以相征討。后帝不臧（后帝堯也。臧善也。）。遷閼伯于商丘主辰（商丘宋地。主祀辰星。辰大火也。）。商人是因。故辰爲商星（商人湯先。）。遷實沈于大夏、主參（大夏今晉陽縣。唐人是因。……）。故參爲晉星。」

## (四)

『國語』周語下、王將鑄無射

王曰「七律者何。」對曰「昔、武王伐殷、歲在鶉火（是時、歲星在張十三度。張鶉火也。）、月在天駟、日在析木之津、辰在斗柄、星在天竈（二十九日己未晦冬至、辰星與須女伏。天竈之首也。）。星與日辰之位皆在北維。顓頊之所建也、帝嚳受之。我姬氏出自天竈及析木者、有建星及牽牛焉（謂從辰星所在須女天竈之首、折木之分、歷建星及牽牛。）。則我皇妣大姜之姪伯陵之後、逢公之所憑神也（逢公、伯陵之後、大姜之姪、殷之諸侯、封於齊地。）。歲之所在、則我有周之分野也。月之所在、辰馬農祥也。我太祖后稷之所經緯也。」

## (五)

『春秋左氏傳』昭公十年

春、王正月。有星出于婺女。鄭裨竈言於子產曰「七月戊子、晉君將死。今茲歲在顓頊之虛。姜氏任氏實守其地。居其維首、而有妖星焉、告邑姜也。邑姜、晉之妣也。天以七紀。戊子、逢公以登星斯於是乎出（逢公、殷諸侯、居齊地者。逢公將死妖星出婺女。時非歲星所在、故齊自當禍、而以

戊子日卒。吾是以譏之。」

03 ①

臣守以為不然禍福所見多義不可一求或在分野或在對衝或在臨下或在視人豈未學者所能詳也今據左傳曰梓慎曰歲在星紀而淫於玄枵（歲と星也星紀在丑斗牛之次也玄枵在子虛危之次也淫猶過也明年當在玄枵今已在玄枵故淫行失次之也）蚺乘龍宗鄭必饑（蚺者正武之宿虛之次也龍者歲と星為青龍失次而出虛危下為可乘也歲星本位東故房心為宗分亢為鄭分也故宗鄭必饑也守曰漢志曰所謂宋鄭之壘候歲星占房心是也）裨竈曰歲弃其次而旅於明年之次以宮鳥帑周楚惡之（旅客處也歲星所在國有福失次於北福衝於南と為朱鳥と尾曰帑鶉大鶉尾周楚之分故周王楚子受其咎也守曰十二月周靈王崩楚子昭卒也）此俱論歲星失次梓慎曰宗鄭則饑裨竈則曰周楚王死皆非空言

「一」火に作る。

03 ②

臣守以為不然。禍福所見、多義、不可一。求、或在分野、或在對衝、或在臨下、或在視人。豈未學者所能詳也。今、據『左傳』曰「梓慎曰、『歲在星紀而淫於玄枵（歲歲星也。星紀在丑、斗・牛之次也。玄枵在子、虛・危之次也。淫猶過也。明年當在玄枵、今已在玄枵。故淫行失次之也。）』蚺乘龍、宋・鄭必饑。」（蚺者玄武之宿、虛之次也。龍者歲。歲星為青龍。失次而出虛・危下為可乘也。歲

星本位東。故房・心為宋分、亢為鄭分也。故宋・鄭必饑也。守曰、『漢志曰所謂『宋・鄭之壘、候歲星、占房・心。』是也。』裨竈曰、『歲弃其次、而旅於明年之次、以害鳥帑、周・楚惡之。』（旅客處也。歲星所在國有福。失次於北、禍衝於南。南為朱鳥、鳥尾曰帑。鶉火・鶉尾周・楚之分。故周王・楚子受其咎也。守曰、「十二月、周靈王崩、楚子昭卒也。」）此俱論歲星失次、梓慎曰「宋・鄭則饑。」、裨竈則曰「周・楚王死。」、皆非空言。

03 ③

臣守おも以為へらく、然らず。禍福の見る所あつ、義多く、一なる可からず。求むるに、或いは分野に在り、或いは對衝に在り、或いは臨下に在り、或いは視人に在り。豈に未だ學ばざる者の能く詳かにする所ならんや。今、『左傳』に「梓慎曰く、『歲星紀に在りて玄枵に淫す（歲は歲星なり。星紀は丑に在り、斗・牛の次なり。玄枵は子に在り、虚・危の次なり。淫は猶ほ過ぐるがごときなり。明年當に玄枵に在るべきに、今已に玄枵に在り。故に之を淫行して次を失するとするなり。）』蚺龍に乗ずれば、宋・鄭必ず饑多ん（蚺なる者は玄武の宿、虚の次なり。龍なる者は歲なり。歲星を青龍と爲す。次を失ひて虚・危の下に出づるを乗す可しと爲すなり。歲星は本より東に位す。故に房・心を宋の分と爲し、亢を鄭の分と爲すなり。故に宋・鄭必ず饑うるなり。守曰く、「漢志に曰ふ所謂『宋・鄭の壘、歲星に候し、房・心に占ふ。』是れなり。」と。』と。裨竈曰く『歲其の次を弃て、而して明年の次に旅し、

以て鳥帑を害せば、周・楚之を惡む（旅は客處するなり。歲星在する所の國に福有り。次を北に失すれば、禍南に衝す。南を朱鳥と爲し、鳥尾を帑と曰ふ。鶉火・鶉尾は周・楚の分なり。故に周王・楚子其の咎を受くるなり。守曰く、「十二月、周の靈王崩じ、楚子昭卒するなり。」と。）と。』と曰ふに據れば、此れ俱に歲星の次を失するを論ずるに、梓慎は「宋・鄭則ち饑ゑん。」と曰ひ、神竈は則ち「周・楚の王死せん。」と曰ひ、皆空言に非ざるなり。

03 ④

(二) 『春秋左氏傳』襄公、二十八年

春、無冰。梓慎曰、「今茲宋鄭其饑乎。歲在星紀、而淫於玄枵（歲星也。星紀在丑、斗・牛之次。玄枵在子、虛・危之次。十八年、晉董叔曰、天道多在西北。是歲、歲星在亥。至此年十一歲、故在星紀。明言乃當在玄枵、今已在玄枵、淫行失次。）以有時苗。陰不堪陽。蛇乘龍（蛇玄武之宿、虛・危之星。龍歲星、歲星木也。木爲青龍。失次出虛・危下、爲蛇所乘。）龍、困・鄭之星也（歲星本位在東方。東方房・心爲宋、角・亢爲鄭。故以龍爲宋・鄭之星。）宋・鄭必饑。玄枵虛中也。枵稔名也。土虛而民稔、不饑何爲。」

(二) 『漢書』卷二十六、天文志『史記』卷二十七、天官書に略同文有り。

宋・鄭之疆、候歲星、占房・心。

(三) (四) 『春秋左氏傳』襄公、二十八年

神竈曰、「今茲周王及楚子皆將死。歲棄其次、而旅於明年之次、以害鳥帑、周楚惡之（旅客處也。歲星棄星紀之次、客在玄枵。歲星所在、其國有福。失次於此、禍衝在南。南爲朱鳥、鳥尾曰帑。鶉火・鶉尾周・楚之分。故周王・楚子受其咎。俱論歲星過次、梓慎則曰「宋・鄭饑」、神竈則曰「周・楚王死」。傳故備舉以示卜占。惟人所在。）」

04 ①

漢書曰成帝陽朔元月犯心占曰其國有憂若有大喪十一月楚王交薨（心爲宗、今楚地是非宗之子孫而禍在其地也所謂在野分是也）

04 ②

『漢書』曰、「成帝陽朔元年、月犯心。占曰、『其國有憂。若有大喪。』十一月、楚王友薨（心爲宋。宋今楚地。是非宋之子孫而禍在其地也。所謂「在分野」、是也。）」

04 ③

『漢書』に曰く、「成帝の陽朔元年、月心を犯す。占に曰く、『其の國に憂有り。若しくは大喪有り。』と。十一月、楚王友薨（心を宋と爲す。宋は今の楚地なり。是れ子孫に非ずして禍其の地に在るなり。所謂「分野に在り」、是れなり。）」と。

04 ④

(一) 『漢書』卷二十六、天文志

陽朔元年七月壬子、月犯心星。占曰、「其國有憂。若有大喪。房・心爲困。今楚地。」十一月辛未、楚王**返薨**。

05 ①

抱朴子曰吳赤烏十三年日烏見三足魏蜀爲不視之須臾吳王孫權薨斯視者受其災是也然者禍福所見不可常典也所以然者世代遐邈絕祭主之曹焉夫人康天地陰陽之氣有喜怒哀樂之情其精上在蒼天之所謂下誠人君故瑞祥所見之國不可不慎也

05 ②

『抱朴子』曰、「吳赤烏十三年、日烏見。三足。魏・蜀爲不視之。須臾吳王孫權薨。」斯「視者受其災」、是也。然者禍福所見不可常典也。所以然者、世代遐邈、絕祭主之曹焉。夫人康天地陰陽之氣、有喜怒哀樂之情。其精上在蒼天。天之所謹、下誠人君。故瑞祥所見之國、不可不慎也。

05 ③

『抱朴子』に曰く、「吳の赤烏十三年、日に烏見る。三足なり。魏・蜀之を視ざると爲す。須臾にして吳王孫權薨ず。」と。斯れ「視る者 其の災を受く」、是れなり。然らば禍福の見る所は典を常にす可からざるなり。然る所以の者は、世代遐邈にして祭主の曹を絶てばなり。夫れ人は天地陰陽の氣に康じ、喜怒哀樂の情有り。其の精 上りて蒼天に在り。天の謹する所、下 人君を誠む。故に瑞祥見る所の國、慎まざる可からざるなり。

05 ④

(一) 『開元占經』卷六、日占二、日中烏見

按『抱朴子』曰、「吳赤烏十三年、日中烏見。三足。然魏・蜀不見。孫權死。」

06 ①

洛書曰從南斗十二度至須女七度爲星紀在丑楊州（斗吳牛女越也）須女八度至危十五度爲玄枵在子青州齊也危十六度至奎四度爲娵訾在亥并州衛也奎五度至胃六度爲降婁在戌徐州魯也胃七度至畢十一度爲大梁在西冀州趙也畢十二度至井十五度爲實沈在申益州晉魏也井十六度至柳八度爲鶉首在未雍州秦也柳九度至張十七度爲鶉火在午周三河也張十八度至軫十一度爲鶉尾在己荊州楚也軫十二度至氐四度爲壽星在辰兗州鄭韓也氐五度至尾九度爲大火在卯豫州宋口尾十度至斗十一度爲折木在寅幽州燕也

06 ②

『洛書』曰、「從南斗十二度至須女七度爲星紀、在丑、楊州（斗吳、牛、女越也）。須女八度至危十五度爲玄枵、在子、青州、齊也。危十六度至奎四度爲娵訾、在亥、并州、衛也。奎五度至胃六度爲降婁、在戌、徐州、魯也。胃七度至畢十一度爲大梁、在申、冀州、趙也。畢十二度至井十五度爲實沈、在甲、益州、晉・魏也。井十六度至柳八度爲鶉首、在未、雍州、秦也。柳九度至張十七度爲鶉火、在午、周、三河也。張十八度至軫十一度爲鶉尾、在己、荊州、楚也。軫十二度至氐四度爲壽星、在辰、兗州、鄭・韓也。氐五度至尾九度

爲大火、在卯、豫州、宋也。尾十度至斗十一度爲折木、在寅、幽州、燕也。」

●前後の文例により「也」字を補った。

06 ③

『洛書』に曰く、「南斗の十二度従り須女の七度に至るを星紀と爲し、丑に在り、楊州なり（斗は吳、牛・女は越なり）。須女の八度より危の十五度に至るを玄枵と爲し、子に在り、青州、齊なり。危の十六度より奎の四度に至るを娵訾と爲し、亥に在り、并州、衛なり。奎の五度より胃の六度に至るを降婁と爲し、戌に在り、徐州、魯なり。胃の七度より畢の十一度に至るを大梁と爲し、酉に在り、冀州、趙なり。畢の十二度より井の十五度に至るを實沈と爲し、申に在り、益州、晉・魏なり。井の十六度より柳の八度に至るを鶉首と爲し、未に在り、雍州、秦なり。柳の九度より張の十七度に至るを鶉火と爲し、午に在り、周、三河なり。張の十八度より軫の十一度に至るを鶉尾と爲し、巳に在り、荊州、楚なり。軫の十二度より氐の四度に至るを壽星と爲し、辰に在り、兖州、鄭・韓なり。氐の五度より尾の九度に至るを大火と爲し、卯に在り、豫州、宋なり。尾の十度より斗の十一度に至るを折木と爲し、寅に在り、幽州、燕なり。」と。

06 ④

(一) 『晉書』卷十一、天文志上、十二次度數

自軫十二度至氐四度爲壽星、於辰在辰、鄭之分野、屬兖州。

自氐五度至尾九度爲大火、於辰在卯、宋之分野、屬豫州。自尾十度至南斗十一度爲折木、於辰在寅、燕之分野、屬幽州。自南斗十二度至須女七度爲星紀、於辰在丑、吳・越之分野、屬揚州。自須女八度至危十五度爲玄枵、於辰在子、齊之分野、屬青州。自危十六度至奎四度爲娵訾、於辰在亥、衛之分野、屬并州。自奎五度至胃六度爲降婁、於辰在戌、魯之分野、屬徐州。自胃七度至畢十一度爲大梁、於辰在酉、趙之分野、屬冀州。自畢十二度至東井十五度爲實沈、於辰在申、魏之分野、屬益州。自東井十六度至柳八度爲鶉首、於辰在未、秦之分野、屬雍州。自柳九度至張十六度爲鶉火、於辰在午、周之分野、屬三河。自張十七度至軫十一度爲鶉尾、於辰在巳、楚之分野、屬荊州。

07 ①

石氏曰甲齊乙東夷丙楚丁南夷戊魏己韓庚秦辛西夷壬燕关北夷也子周丑翟寅趙卯鄭辰晉巳衛午秦未中山申齊西魯戌趙亥燕也

07 ②

石氏曰、「甲齊、乙東夷、丙楚、丁南夷、戊魏、己韓、庚秦、辛西夷、壬燕、癸北夷也。子周、丑翟、寅趙、卯鄭、辰晉、巳衛、午秦、未中山、申齊、西魯、戌趙、亥燕也。」

07 ③

石氏曰く、「甲は齊、乙は東夷、丙は楚、丁は南夷、戊は魏、己は韓、

庚は秦、辛は西夷、壬は燕、癸は北夷なり。子は周、丑は翟、寅は趙、卯は鄭、辰は晉、巳は衛、午は秦、未は中山、申は齊、酉は魯、戌は趙、亥は燕なり。」と。

07④

(一) 『開元占經』卷六十四、日辰占那三

石氏曰、「甲爲齊、乙爲東海、丙爲楚、丁爲南蠻、戊爲魏、己爲韓、庚爲秦、辛爲西夷、壬爲燕、癸爲北夷。」

石氏曰、「子爲周、丑爲翟、寅爲趙、卯爲鄭、辰爲晉、巳爲衛、午爲秦、未爲中山、申爲齊、酉爲魯、戌爲趙、亥爲燕。」

※『漢書』卷二十六、天文志にも類似的の占辭が見られるが、「石氏曰」を「一日」に作り、壬に「燕・趙」を、辰に「邯鄲」を、戌に「吳・越」を、亥に「燕・代」を配当する。

08①

漢書天文志曰秦之疆候大白占狼狐也吳楚之疆候熒惑占鳥衡也燕齊之疆候辰星占虛危也宋鄭之疆候歲星占房心也晉之疆亦候辰星占參罰也在東南爲陽則曰歲星熒惑鎮星占於街南畢主也其在西北爲陰則月大白辰星占於街北昴主也（七耀天文曰日月五星初犯守出入日以甲乙期爲百二十日丙丁爲八十日戊己爲六十日庚辛爲二十日壬关爲二十日也色赤爲楚青爲齊黃爲衛黒爲燕白爲秦也犯守三日內大雨其灾解小雨無益也）

08②

『漢書』天文志曰、「秦之疆、候太白、占狼、弧也。吳・楚之疆、候熒惑、占鳥・衡也。燕・齊之疆、候辰星、占虛・危也。宋・鄭之疆、候歲星、占房・心也。晉之疆亦、候辰星、占參・罰也。在東南爲陽、陽則日・歲星・熒惑・鎮星、占於街南、畢主也。其在西北爲陰、陰則月・太白・辰星、占於街北、昴主也。」（七耀天文曰、「日月五星初犯守出入日、以甲・乙期爲百二十日、丙・丁爲八十日、戊・己爲六十日、庚・辛爲二十日、壬・癸爲二十日也。色赤爲楚、青爲齊、黃爲衛、黒爲燕、白爲秦也。犯守三日內、大雨其灾解。小雨無益也。」）

08③

『漢書』天文志に曰く、「秦の疆、太白に候し、狼・弧に占ふなり。吳・楚の疆、熒惑に候し、鳥・衡に占ふなり。燕・齊の疆、辰星に候し、虚・危に占ふなり。宋・鄭の疆、歲星に候し、房・心に占ふなり。晉の疆も亦た、辰星に候し、參・罰に占ふなり。東南に在るを陽と爲し、陽は則ち日・歲星・熒惑・鎮星、街南に占し、畢主るなり。其の西北に在るを陰と爲し、陰は則ち月・太白・辰星、街北に占し、昴主るなり。」と。『七耀天文』に曰く、「日月五星の初めて犯守出入する日、甲・乙を以てすれば期を百二十日と爲し、丙・丁なれば八十日と爲し、戊・己なれば六十日と爲し、庚・辛なれば二十日と爲し、壬・癸なれば二十日と爲すなり。色赤なれば楚と爲し、青なれば齊と爲し、黄なれば衛と爲し、黒なれば燕と爲し、白なれば秦と爲すなり。犯守して三日の内、大



雨あれば其の災解かる。小雨なれば益無きなり。」と。

08④

(一) 『漢書』卷二十六、天文志(『史記』天官書に略同文有り)。

秦之疆、候<sup>因</sup>白、占狼・<sup>因</sup>。吳・楚之疆、候<sup>災</sup>惑、占鳥衡。  
燕・齊之疆、候辰星、占虛・<sup>危</sup>。宋・鄭之疆、候<sup>災</sup>星、占房・  
心。晉之疆亦、候辰星、占參・<sup>罰</sup>。及秦并吞三晉・燕・代、  
自河・山以南者中國。中國於四海内則在東南、為陽、陽則日・  
歲星・<sup>災</sup>惑・<sup>填</sup>星、占於街南、畢主之。其西北則胡・貉・  
月氏旃裘引弓之民、為陰、陰則月・<sup>因</sup>白・辰星、占於街北、  
昴主之。

(田中良明)

### ○五明灾消福至

【概要】瑞祥災異による吉凶禍福は恒常的ではなく、君主の修徳が必要であると説く。殷の湯王から曹魏の明帝に至る歴朝君王の修徳の故事を載せ、唐太宗詔勅の佚文を載す。

01①

五灾消福至

臣守真表曰感古人之節思酬<sup>〇</sup>聖主之恩緬尋千古每披典籍聖帝明王莫不欽若昊天禘承謹誠也夫帝王者配德天地叶契陰陽發号施令動關幽顯休咎之徵隨感而作故書曰惠迪吉從逆凶唯影響也(「迪道也順道

吉從逆凶吉凶之報若影之隨形響之應聲音不虛也)

01②

五、明灾消福至。

臣守真表曰、「感古人之節、思酬<sup>〇</sup>聖主之恩、緬尋千古、每披典籍、聖帝・明王莫不欽若昊天、祇承謹誠也。夫帝王者、配德天地、叶契陰陽、發號施令、動關幽顯、休咎之徵、隨感而作。故『書』曰『惠迪吉、從逆凶、唯影響。』也(「迪道也。順道吉、從逆凶。吉凶之報、若影之隨形、響之應聲。言不虛也。)」。

○本卷巻頭の小篇目と後文の目録に抛り「明」を補った。

01③

五、災消え福至るを明らかにす。

臣守真表して曰く、「古人の節に感じ、<sup>〇</sup>聖主の恩を思酬し、緬<sup>ほ</sup>かに千古を尋ね、毎に典籍を披けば、聖帝・明王の欽みて昊天に若い、祇<sup>ただ</sup>みて謹誠を承けざる莫きなり。夫れ帝王なる者は、徳を天地に配し、陰陽に叶契し、號を發し令を施し、動もすれば幽顯を開き、休咎の徵、感に隨ひて作る。故に『書』に『<sup>〇</sup>迪に恵ふは吉、逆に従ふは凶、唯れ影響す。』と日ふなり(「迪は道なり。道に順ふは吉、逆に従ふは凶。吉凶の報、影の形に隨ひ、響の聲に應ずるが若し。虚ならざるを言ふなり。)」と。

01④

(一) 本節は、薩守真的の上表文の引用から始まるが、表の文末に見られるはずの「表以聞」などの文句が無いため、部分的な引用

若しくは節略された文章と考えられる。また、本節全体が上表文からの引用である可能性も高いが、本稿では取り敢えず最初の一文のみを上表文からの引用として読んだ。

(二) 『文苑英華』卷一九七所載、虞世基「出塞」に、

上將三略遠、元戎九命尊、緬懷古人節、思酬明主恩。

と有るのに拠れば、本節「聖主」の上の空格は闕字であると考えられる。

(三) 『晉書』卷二十七、志第十七、五行上

夫帝王者、配德天地、叶契陰陽、發號施令、動關幽顯、休

咎之徵、隨感而作。故『書』曰、「惠迪吉、從逆凶、惟影響。」

昔、伏羲氏繼天而王、……。

この文の前半は、『魏書』卷一百一十二上、靈徵志八上第十七の冒頭にも類似的文が見られる。

(四) 『尚書』大禹謨

禹曰、「惠迪吉、從逆凶、惟影響。」〈天道也。順道吉、從逆凶。

吉凶之報、若影之隨形、響之應聲。言不虛。〉

02①

漢書曰人君能修政恭饗厥罰則灾消而福至不能修政則福息而禍生吉凶無常隨行而成禍福也

02②

『漢書』曰、「人君能修政、恭饗厥罰、則災消而福至。不能修政、

則福息而禍生。吉凶無常、隨行而成禍福也。」

02③

『漢書』に曰く、「人君能く政を修め、恭しく厥の罰を饗げば、

則ち災消えて福至る。政を修むること能はざれば、則ち福息

みて禍生ず。吉凶に常無く、行に隨ひて禍福を成すなり。」と。

02④

(一) 『漢書』卷二十七下之下、五行志第七下之下

凡日所躔而有變、則分野之國失政者受之。人君能修政、共

御厥罰、則災消而福至。師古曰、共讀曰恭。御讀曰饗。

又讀如本字。不能、則災息而禍生。師古曰、息謂蕃滋也。

故經書災而不記其故。蓋吉凶亡常、隨行而成禍福也。

03①

周禮曰大杜大荒大裁素服。大杜疫病也。大荒飢饉也。大裁水火為灾也。

君臣素服縞聯冠避正殿若晋伯宗哭梁山之崩也。

03②

『周禮』曰、「大札・大荒・大裁、素服。大札疫病也。大荒飢饉也。

大裁水火為災也。君臣素服、縞冠、避正殿。若晋伯宗哭梁山之崩

也。」

03③

『周禮』に曰く、「大札・大荒・大裁あれば、素服す。大札は疫

病なり。大荒は飢饉なり。大裁は水火災を為すなり。君臣素服

し、縞冠し、正殿を避く。晉の伯宗（三）の梁山の崩るるに哭するが若きなり。」と。

03④

（一）『周禮』春官、司服

大衮・大荒・大裁、素服。〔大衮〕疫病也。大荒、饑饉也。

太裁、水火爲害。君臣素服、縞冠。若晉伯宗哭梁山之崩。

（二）伯宗は春秋時代の晋の臣。「梁山の崩るる」ことは『春秋』の成公五年夏に見え、伯宗がそれに「哭す」ことは『穀梁傳』に見える。但し、『穀梁傳』は「伯宗」を「伯尊」に作り、『漢書』五行志第七下之上所引の『穀梁傳』は伯宗に作る〔左氏傳〕は「伯宗」に作る。）。

04①

昔禹湯罪己其興也勃焉桀紂罪人其亡也忽焉〔左傳之辭也勃盛貌也忽遠貌也〕成湯之世有七年之旱剪髮為犧千里雨降大戊之時葉聲生朝懼而修德遂使十有六國重譚而來高宗祭成湯有雉登斯耳而雉受祖己之訓立中興之功管蔡流言而周公居東雷電以風偃禾拔木於是成王啓金縢乃還迎公於郊而禾盡起也熒惑守心宋景弃三移而延壽廿一年也

〔一〕「速」に作る。

04②

昔、禹・湯罪己、其興也勃焉。桀・紂罪人、其亡也忽焉〔左傳〕

之辭也。勃盛貌也。忽速貌也。成湯之世、有七年之旱。剪髮爲犧、千里雨降。大戊之時、桑・穀生朝。懼而修德、遂使十有六國重譚而來。高宗祭成湯、有雉登鼎耳而雉、受祖己之訓、立中興之功。管・蔡流言而周公居東、雷電以風偃禾拔木。於是成王啓金縢、乃還迎公於郊、而禾盡起也。熒惑守心、宋景弃三移、而延壽廿一年也。

04③

昔、禹・湯己を罪し、其の興るや勃焉たり。桀・紂人を罪し、其の亡ぶや忽焉たり〔左傳〕の辭なり。勃は盛んなる貌なり。忽は速やかなる貌なり。成湯の世、七年の旱有り。髮を翦り犧と爲せば、千里雨降る。太戊の時、桑・穀朝に生ず。懼れて徳を修むれば、遂に十有六國をして譚を重ねて來たらしむ。高宗成湯を祭るに、雉鼎耳に登りて雉く有り、祖己の訓を受くれば、中興の功を立つ。管・蔡流言して周公東に居り、雷電あり風を以て禾を偃し木を抜く。是に於いて成王、金縢を啓き、乃ち還るに公を郊に迎ふれば、而ち禾盡く起つなり。熒惑心を守し、宋景三移を弃つれば、而ち壽廿一年を延ぶるなり。

04④

（一）『春秋左氏傳』莊公十一年

秋、宋大水。公使弔焉曰、「天作淫雨害於棗盛若之何不弔（不為天所愍弔）」對曰、「孤實不敬、天降之災、又以為君憂拜命之辱（謝辱厚命）」臧文仲曰、「宋其興乎（臧文仲、魯大夫）。禹・湯罪己、其興也勃焉（悖盛貌）。桀・紂罪人、

其亡也忽焉（忽速貌。）。」

(二) 『太平御覽』卷五百九十一所引『唐書』所載太宗「金鏡述」雖曰天時、抑亦人事也。成湯之世、有七年之旱、剪髮爲犧、

千里雨降。因戊之時、桑・穀生朝。懼而修德、遂使十有六國重譯而來。此豈非人事者也。

※湯の故事は、『春秋左氏傳』襄公十年、『正義』所引『書傳』（尚書大傳）に類似の文が見える他、『呂氏春秋』順民篇にも類似の記事が有るが、『呂氏春秋』は「七年」を「五年」に作る等の相異が有る。また、太戊の故事は、『孔子家語』五儀解篇・『尚書』咸有一德篇末の書序等に類似の文が見られる。

(三) 『尚書』高宗彤日、小序

高宗祭成湯、有飛雉升鼎耳而雩。祖訓諸王。作高宗彤日。

高宗之訓。

『藝文類聚』卷九十、鳥部上、雉所引『尚書大傳』

武丁祭成湯、有雉飛鼎耳而雩。問諸祖己、曰、「雉者野鳥也。

不當升鼎。升鼎者、欲爲用也。遠方將有來朝者乎。」武丁

思先王之遺、辨髮重譯至者六國。

※諸書に類似の文が見られる。

(四) 『漢書』卷二十七下之下、五行志下之下、五行皆失二、星隕、

嚴公七年の條、顏師古注

武王有疾、周公作金縢之書爲王請命、王翌日乃瘳。後武王崩、成王即位。管、蔡流言而周公居東。天大雷電、以風禾盡偃、

大木斯拔。王啓金縢、乃得周公代武王之說。王執書以泣、遣使者逆公。王出郊、天乃雨、反風、禾則盡起。

※『尚書』金縢篇を参照。

(五) 『呂氏春秋』季夏紀第六、制樂

宋景公之時、熒惑在心、公懼、召子韋而問焉曰、「熒惑在心何也。」子韋曰、「熒惑者天罰也。心者宋之分野也。禍當於君。雖然、可移於宰相。」公曰、「宰相所與治國家也、而移死焉、不祥。」子韋曰、「可移於民。」公曰、「民死、寡人將誰爲君乎。寧獨死。」子韋曰、「可移於歲。」公曰、「歲害則民饑、民饑必死。爲人君而殺其民以自活也、其誰以我爲君乎。是寡人之命固盡已、子無復言矣。」子韋還走、北面載拜曰、「臣敢賀君。天之處高而聽卑。君有至德之言三、天必三賞君。今夕熒惑其徙三舍。君延年二十一歲。」公曰、「子何以知之。」對曰、「有三善言必有三賞。熒惑必三徙舍、舍行七星、星一徙當七年、三七二十一、臣故曰『君延年二十一歲』矣。臣請伏於陛下以伺候之。熒惑不徙、臣請死。」公曰、「可。」是夕熒惑果徙三舍。

※『史記』卷三十八、宋微子世家第八等にも類似の文が見られる。

05 ①

晉書曰明帝大和初太史令許芝奏今日月薄蝕析於靈星帝詔曰蓋聞人主政有不得則天懼之以災異所以謹告使得自脩也故日月薄光明治道

有不當者朕即位以來既不能光明先帝聖德而化有不合於皇神故上天有以宥之宜勅自脩有以報於神明天之於人猶父之於子未有父欲有貴其子而可獻成饌以求免也禳祠之於義未聞也群公卿士其各勉修厥職有可以補朕不遂者各封上之

〔一〕「責」に作る。

05 ②

『晉書』曰、「明帝太和初、太史令許芝奏、『今、日月薄蝕。祈於靈星。』帝詔曰、『蓋聞、人主政有不得則天懼之以災異、所以謹告使得自脩也。故日月薄光、明治道有不當者。朕即位以來、既不能光明先帝聖德而化有不合於皇神。故上天有以寤之、』宜勅自脩有以報於神明。』天之於人猶父之於子。未有父欲有責其子、而可獻盛饌以求免也。禳祠之、於義未聞也。群公・卿・士、其各勉修厥職、有可以補朕不遂者、各封上之。』

05 ③

『晉書』に曰く、「明帝の太和の初、太史令許芝奏す、『今、日月薄蝕す。靈星に祈らん。』と。帝詔して曰く、『蓋し聞く、人主の政に不得有れば則ち天之を懼れしむに災異を以てするは、謹告し自ら脩むるを得しめんとする所以なりと。故に日月光を薄くし、治道に當たらざる者有るを明かにす。朕位に即きて以來、既に先帝の聖徳を光かし明かにすること能はずして化するに皇神に合せざる有り。故に上天に以て之を寤らしめんとする有り、『宜しく勅して自ら脩め以て神明に報ゆること有れ。』と。天の人に

於けるは猶ほ父の子に於けるがごとし。未だ父の其の子を責むること有らんと欲するに、而るに盛饌を獻じ以て免るるを求む可きこと有らざるなり。之を禳祠するは、義に於いて未だ聞かざるなり。群公・卿・士、其れ各と勉めて厥の職を修め、以て朕の遂ばざるを補す可き有る者は、各と之を封上せよ。』と。』

05 ④

（一）『晉書』卷十二、天文志中、史傳事驗、日蝕

明帝太和初、太史令許芝奏、「日應蝕、與太尉於靈臺祈禳。」帝曰、「蓋聞、人主政有不德、則天懼之以災異。所以謹告使得自修也。故日月薄蝕、明治道有不當者。朕即位以來、既不能光明先帝聖德、而施化有不合於皇神。故上天有以寤之、』宜敕政自修、有以報於神明。』天之於人、猶父之於子。未有父欲責其子、而可獻盛饌以求免也。今、外欲遣上公與太史令俱禳祠之、於義未聞也。羣公・卿・士・大夫、其各勉修厥職、有可以補朕不逮者、各封上之。」

※『宋書』五行志五、皇之不極、日蝕に略同文有り。晉志の「明帝」を「魏明帝」に、「不德」を「不得」に、「宜敕」を「宜勸」に、「俱禳祠之」を「具禳祠」に作り、「大夫」の二字無し。

06 ①

大正文皇帝詔書曰門下昔大戊有桀桀之變懼而自脩商辛有鸚雀之祥矜而自決變而□□享遐年之慶祥而自決更招傾覆之憂吉凶同□□鏡

斯在朕社守神器仰事上玄夙夜戰兢無忌馭朽每休徵降福未敢剋當而星象暫愆必增悚慄大史奏今月下旬以來有星出於南方光□□□雖天道高遠陰陽不測固應為朕薄德致茲□□□以一人之慮思萬機之道必當明有所不燭智有所不周或朕心未諭於下と情不達於上是用終朝三省通夜九思靜念治方未詳厥趣兢と蒙と氷炭□□□令京官文武官及行暑以上各上封事以規朕闕其形罰不衷於法治政不便於時或不肖升朝共相求阿黨賢能在野未蒙採擢具具錄聞奏有犯無隱廣直言之路開不諱之門庶求正道以答天□□□□

「二」右旁に「鶉与咸反尔雅鶉魚雀又即雀鷄也」の書き入れ有り。

「二」「洪」に作る。

「三」右旁に「刑」の書き入れ有り。

06②

太宗文皇帝詔書曰、「門下。昔、<sup>〔</sup>戊有桑・穀之變、懼而自脩。商辛有鶉・雀之祥、矜而自洪。變而□□、享遐年之慶、祥而自洪、更招傾覆之憂。吉凶同□□鏡。斯在朕、祇守神器、仰事上玄、夙夜戰兢、無忌馭朽。每休徵降福、未敢剋當。而星象暫愆、必增悚慄。太史奏、『今月下旬以來、有星出於南方、光□□□。』雖天道高遠、陰陽不測、固應為朕薄德致茲。□□□。以一人之慮、思萬機之道、必當明有所不燭、智有所不周。或朕心未諭於下、下情不達於上。是用終朝三省、通夜九思、靜念治方、未詳厥趣。兢兢蒙蒙、氷炭□□□。令京官・文武官及行暑以上、各上封事以規朕闕。其刑罰不衷於法、治政不便於時。或不肖升朝、共相求阿黨、賢能

在野、未蒙採擢。宜具錄聞。奏有犯、無隱。廣直言之路、開不諱之門。庶求正道以答天。□□□□。」

「二」「鶉。與咸反。爾雅。鶉。負雀。」又即雀鷄也。」

06③

太宗文皇帝の詔書に曰く、「門下。昔、太戊に桑・穀の變有り、懼れて自ら脩む。商辛に鶉・雀の祥有り、矜りて自ら洪にす。變にして□□、遐年の慶を享け、祥にして自ら洪にし、更に傾覆の憂を招けり。吉凶同じく□□鏡。斯れ朕に在りては、祇みて神器を守り、仰ぎて上玄に事へ、夙夜戰兢とし、馭朽たるを忌む無し。休徵降福ある毎に、未だ敢へて剋當せず。而して星象暫に愆へば、必ず悚慄を増す。太史奏す、『今月下旬以來、星の南方に出づる有り、光□□□。』と。天道高遠にして、陰陽測らずと雖も、固より應に朕が薄徳の爲に茲を致すべし。□□□。一人の慮を以て、萬機の道を思へば、必ず當に明に燭さざる所有り、智に周くせざる所有るべし。或いは朕が心未だ下に諭られず、下の情上に達せざるか。是を用て終朝三省し、通夜九思し、靜かに治方を念ふも、未だ厥の趣を詳かにせず。兢兢蒙蒙として、氷炭□□□。京官・文武官及び行暑以上に令す、各々封事を上り以て朕が闕を規せ。其の刑罰法に衷らざるか、治政時に便ならざるか。或いは不肖にして朝に升り、共に相阿黨を求め、賢能野に在り、未だ採擢を蒙らざるか。宜しく具さに錄聞すべし。奏に犯有るも、隱す無かれ。直言の路を廣くし、不諱の門を開かん。

庶はくは正道を求め以て天に答へん。□□□□。」と。  
 「二」「鶉。與咸の反。『爾雅』に、「鶉。負雀なり。」と。又は即ち雀鷄なり。」

06 ④

(一) この詔勅、『唐大詔令集』及び同『補編』未収。

(二) 『孔子家語』五儀解篇

昔者、殷王帝辛<sup>①</sup>之世(帝紂)有雀生大鳥於城隅焉。占之曰、「凡以小生大、則國家必王而名必昌。」於是帝辛介雀之德(介助也。以雀之德為助也。)不修國政、亢暴無極。朝臣莫救、外寇乃至、殷國以亡。此即以己逆天時、詭福反為禍者也。又其先世殷王<sup>②</sup>太戊之時、道缺法圯、以致天譴。桑穀生于朝、七日大拱。占之者曰、「桑穀野木而不合生朝。意者國亡乎。」太戊恐駭、側身修行、思先王之政、明養民之道。三年之後、遠方慕義重譯至者十有六國。此即以己逆天時、得禍為福者也。

なお、帝辛の故事を『戰國策』宋策は「宋王之時」とし、『新序』雜事篇は「宋康王時」とする。

(三) 『篆隸萬象名義』(高山寺古辭書資料第一)東京大学出版会、一九七七)第六帖、卷第廿四、鳥部

鶉。与藏反。負雀。鶉。之延反。鷄。

『重修玉篇』卷二十四、鳥部第三百九十

鶉。以箴切。鷄也。鶉。之然切。鷄屬。

(四) 『爾雅』釋鳥第十七

鶉、負雀。(鶉鷄也。江南呼之為鶉。善捉雀、因名云。)(音淫。)

07 ①

此等條貫不可勝舉今略載脩德之君也易略例曰告無咎者本亦有咎由吉故得免咎也

07 ②

此等條貫、不可勝舉。今、略載脩德之君也。『易略例』曰、「告無咎者、本亦有咎。由吉故得免咎也。」

07 ③

此れ等の條貫、擧ぐるに勝ふ可からず。今、脩德の君を略載せしなり。『易略例』に曰く、「咎無きと告ぐる者は、本より亦た咎有り。吉に由るが故に咎を免るるを得るなり。」と。

07 ④

(一) 『周易略例』

凡言无咎者、本皆有咎者也。防得其道故得无咎也。吉无咎者、本亦有咎、由吉故得免也。

(田中良明)

〇六、目録

【概要】本項目は、本書全体の目録である。現在欠巻となつてい  
る巻の目録も記載されており、本書全体の構成が判明する大変貴  
重な記載である。本項目では④は省略し、②における文字の訂正  
は残存巻は各本文に（本項では「○」で表示）、それ以外は、前  
後からの推測、もしくは太田晶二郎『天地瑞祥志』略説―附け  
たり、所引の唐令佚文―（『太田晶二郎著作集』第一冊、吉川弘  
文館、一九九一年。初出は一九七三年）を参考に行つた（本項で  
は「●」で表示）。

01 ①

六目録

天地瑞祥志 第一 條例目録

一啓 二明載字 三明災異例 四明分野 五明災消福至 六明目

録

01 ②

六、目録

天地瑞祥志 第一 條例・目録

一、啓 二、明載字 三、明災異例 四、明分野 五、明災消福

至 六、明目録

01 ③

六、目録

天地瑞祥志 第一 條例・目録

一、啓 二、載字を明かにす 三、災異の例を明かにす 四、分  
野を明かにす 五、災消え福至るを明かにす 六、目録を明かに  
す

02 ①

第二

一三才始 二天地像 三天 四天 五人 六人變相

02 ②

第二

一、三才始 二、天地像 三、天 四、地● 五、人 六、人變相

02 ③

第二

一、三才始 二、天地像 三、天 四、地 五、人 六、人變相

03 ①

第三

一三光 二黄道 三日蝕 四救蝕 四日光變 六日雜異 七日闕

八晷

一月蝕 二月光變 三月雜異

一五星惣載 二歳星 三熒惑 四鎮星 五太白 六辰星 七五星

會 八 九三星會 十二星會

03 ②



- 第三  
 一、三光 二、黄道 三、日蝕 四、救蝕 五、日光變 六、日  
 雜異 七、日鬪 八、晷
- 一、月蝕 二、月光變 三、月雜異
- 一、五星惣載 二、歳星 三、熒惑 四、鎮星 五、太白 六、  
 辰星 七、五星會 八、四星會 九、三星會 十、二星會
- 03 ③
- 第三  
 一、三光 二、黄道 三、日蝕 四、救蝕 五、日光變 六、日  
 雜異 七、日鬪 八、晷
- 一、月蝕 二、月光變 三、月雜異
- 一、五星惣載 二、歳星 三、熒惑 四、鎮星 五、太白 六、  
 辰星 七、五星會 八、四星會 九、三星會 十、二星會
- 04 ①
- 第四  
 一、東七宿〔附見六星〕 二、北七宿〔附見二星〕
- 04 ②
- 第四  
 一、東七宿〔附見六星〕 二、北七宿〔附見二星〕
- 04 ③
- 第四  
 一、東七宿〔附見六星〕 二、北七宿〔附見二星〕
- 一、東七宿〔六星を附見す〕 二、北七宿〔二星を附見す〕
- 05 ①
- 第五  
 一、西七宿〔附見三星〕 二、南七宿〔附見三星〕
- 05 ②
- 第五  
 一、西七宿〔附見三星〕 二、南七宿〔附見三星〕
- 05 ③
- 第五  
 一、西七宿〔三星を附見す〕 二、南七宿〔三星を附見す〕
- 06 ①
- 第六  
 内官九十八官〔附見四官〕
- 06 ②
- 第六  
 内官九十八官〔附見四官〕
- 06 ③
- 第六  
 内官九十八官〔四官を附見す〕

- 07 ① 第七  
一内官卅六官〈附見五官〉 二外官九十官〈附見二官〉
- 07 ② 第七  
一、内官卅六官〈附見五官〉 二、外官九十一官〈附見二官〉
- 07 ③ 第七  
一、内官卅六官〈五官を附見す〉 二、外官九十一官〈二官を附見す〉
- 08 ① 第八  
一流星名状 二流星廿八宿 三流星内官 四流星外官 五流星晝  
六流星日月 七流星五星〈五星自流附見〉 八星 九流星暈上
- 08 ② 第八  
一、流星名状 二、流星廿八宿 三、流星内官 四、流星外官  
五、流星晝 六、流星日月 七、流星五星〈五星自流附見〉 八、  
星 九、流星暈上
- 08 ③ 第十 暈 雲氣  
一、流星名状 二、流星廿八宿 三、流星内官 四、流星外官  
五、流星晝 六、流星日月 七、流星五星〈五星自流附見す〉 八、  
星 九、流星暈上
- 09 ① 第九  
一客彗惣載 二客彗別名 三客彗晝出 四客彗出〈日月辛〉 五  
客彗出五星 六客彗出廿八宿 七客彗出内官 八客彗出外官 九  
天漢
- 09 ② 第九  
一、客彗惣載 二、客彗別名 三、客彗晝出 四、客彗出日月  
〔辛〕 五、客彗出五星 六、客彗出廿八宿 七、客彗出内官 八、  
客彗出外官 九、天漢
- 09 ③ 第九  
一、客彗惣載 二、客彗別名 三、客彗晝出 四、客彗日月に  
出づ 五、客彗五星に出づ 六、客彗廿八宿に出づ 七、客彗内  
官に出づ 八、客彗外官に出づ 九、天漢
- 10 ① 第十 暈 雲氣  
一 暈珥状 二 日暈抱珥 三 月暈 四 暈五星〈五星自暈附見〉 五  
暈廿八宿 六 暈内官 七 暈外官 八 虹蜺〈日旁虹蜺附見〉  
雲氣

一 雲氣惣載 二 正月朔旦雲氣 三 五色雲氣 四 日旁雲氣 五月旁雲氣 六 廿八宿雲氣 七 内官雲氣 八 外官雲氣

10 ②

第十 暈 雲氣

一、暈珥狀 二、日暈抱珥 三、月暈 四、暈五星（五星自暈附見）  
五、暈廿八宿 六、暈内官 七、暈外官 八、虹蜺（日旁虹蜺附見）

雲氣

一、雲氣惣載 二、正月朔旦雲氣 三、五色雲氣 四、日旁雲氣  
五、月旁雲氣 六、廿八宿雲氣 七、内官雲氣 八、外官雲氣

10 ③

第十 暈 雲氣

一、暈珥狀 二、日暈抱珥 三、月暈 四、暈五星（五星自暈附見）  
五、暈廿八宿 六、暈内官 七、暈外官 八、虹蜺（日旁虹蜺附見）

雲氣

一、雲氣惣載 二、正月朔旦雲氣 三、五色雲氣 四、日旁雲氣  
五、月旁雲氣 六、廿八宿雲氣 七、内官雲氣 八、外官雲氣

11 ①

第十一 雷 電

雷物惣載 始雷 雷而無雲及雨 冬雷 雷而後電 軍上雷 霹靂

電 陰暄 晝冥 露雪 霰 雹 霜 霧 旱 熱 寒

11 ②

第十一 雷 電

雷物惣載 始雷 雷而無雲及雨 冬雷 雷而後電 暈上雷 霹靂  
電 陰暄 晝冥 露雪 霰 雹 霜 霧 旱 熱 寒

11 ③

第十一 雷 電

雷物惣載 始雷 雷して雲無くして雨に及ぶ 冬雷 雷して後に電  
暈上雷 霹靂 電 陰暄 晝冥 露雪 霰 雹 霜 霧 旱 熱 寒

12 ①

第十二

一 風物惣載 二 風期日 三 正月朔旦風 四 五音風 五 六情風 六 八風（主客附見） 七 廻風雨

雨

一 雨物惣載 二 候雨 三 候雨晴 四 時雨（正口朔附見） 五 當雨  
不雨 六 偏雨 七 無雲而雨（軍雨附見） 八 異雨 九 霖雨

12 ②

第十二

一、風物惣載 二、風期日 三、正月朔旦候風 四、五音風 五、六情風 六、八風（主客附見） 七、廻風（雨）

## 雨

一、雨惣載 二、候雨 三、候雨晴 四、四時雨（正月朔附見） 五、當雨不雨 六、偏雨 七、無雲而雨（軍雨附見） 八、異雨 九、霖雨

## 12 ③

## 第十二

一、風惣載 二、風期日 三、正月朔旦候風 四、五音風 五、六情風 六、八風（主客附見す） 七、廻風

## 雨

一、雨惣載 二、候雨 三、候雨晴 四、四時雨（正月朔附見す） 五、當に雨ふるべくして雨ふらず 六、偏雨 七、雲無くして雨ふる（軍雨附見す） 八、異雨 九、霖雨

## 13 ①

## 第十三 夢

一、夢惣載 二、天地 三、人鬼神 四、人體 五、文書衣服 六、金玉瑟鼓 七、宅田 八、飲食屎 九、訴訟 十、劔弓 十一、龍蛇 十二、六畜 十三、禽獸 十四、魚龜 十五、水火 十六、道路行臥 十七、船車 十八、山草木 十九、冢墓

## 13 ②

## 第十三 夢

一、夢惣載 二、天地 三、人鬼神 四、人體 五、文書衣服 六、

金玉瑟鼓 七、宅田 八、飲食屎 九、訴訟 十、劔弓 十一、

龍蛇 十二、六畜 十三、禽獸 十四、魚龜 十五、水火 十六、道路行臥 十七、船車 十八、山草木 十九、冢墓

## 13 ③

## 第十三 夢

一、夢惣載 二、天地 三、人鬼神 四、人體 五、文書衣服 六、金玉瑟鼓 七、宅田 八、飲食屎 九、訴訟 十、劔弓 十一、龍蛇 十二、六畜 十三、禽獸 十四、魚龜 十五、水火 十六、道路行臥 十七、船車 十八、山草木 十九、冢墓

## 14 ①

## 第十四

一、音聲 二、童謡 三、妖言 四、革俗 五、神 六、鬼 七、魂魄 八、物精

## 14 ②

## 第十四

一、音聲 二、童謡 三、妖言 四、革俗 五、神 六、鬼 七、魂魄 八、物精

## 14 ③

## 第十四

一、音聲 二、童謡 三、妖言 四、革俗 五、神 六、鬼 七、魂魄 八、物精

15 ①

第十五

農業 百穀 禾 秬必亡 稻 黍 稷 秫 粟 稌 菽 麥 麻  
蠶 草 著 芝英 蕪菁 華平 朱草 萸英 福并 延嘉 紫  
蓬 平甫 窟連 萍實 屈軼 蜚廉 菊 蒺藜 苦買 蕙苾  
薑 瓜 薺 葶藶 水藻 艾 三蔓 葵 福草 禮草 葳蕤

15 ②

第十五

農業 百穀● 禾 秬鬯● 稻 黍 稷 秫 粟 稌 菽 麥 麻  
蠶 草 著 芝英 蕪菁● 華平 朱草 萸英● 福并 延嘉 紫蓬  
平甫 賓連 萍實 屈軼 蜚廉 菊 蒺藜 苦買 蕙苾 薑  
瓜 薺 葶藶 水藻 艾 三蔓● 葵 福草 禮草 葳蕤●

15 ③

第十五

農業 百穀 禾 秬鬯 稻 黍 稷 秫 粟 稌 菽 麥 麻  
蠶 草 著 芝英 蕪菁 華平 朱草 萸英 福并 延嘉 紫蓬  
平甫 賓連 萍實 屈軼 蜚廉 菊 蒺藜 苦買 蕙苾 薑  
瓜 薺 葶藶 水藻 艾 三蔓 葵 福草 禮草 葳蕤

16 ①

第十六 月令

五行 木 火 土 金 水 (禮泉井附見)

16 ②

第十六 月令

五行 木 火 土 金 水 (禮泉・井附見)  
16 ③  
第十六 月令  
五行 木 火 土 金 水 (禮泉・井附見)

17 ①

第十七

宅舍 光 血 穴 毛 衣服 床 刀劍 鏡 鼎 釜 甗 甗  
印璽 金滕 環 玉 貝 蕪 胡鈎 山 石 舩 金車 銀車  
象車 山車 烏車 威車

17 ②

第十七

宅舍 光 血 穴 毛 衣服 床 刀劍 鏡 鼎 釜 甗 甗  
印璽 金滕 環 玉 貝 蘇 胡鈎 山 石 船 金車 根車  
象車 山車 烏車 威香

17 ③

第十七

宅舍 光 血 穴 毛 衣服 床 刀劍 鏡 鼎 釜 甗 甗  
印璽 金滕 環 玉 貝 蘇 胡鈎 山 石 船 金車 根車  
象車 山車 烏車 威香

18 ①

第十八 禽惣載

鳳皇 發明 焦明 鸛鶴 幽昌 鸞 吉利鳥 富貴鳥 鸞鸞 商  
 鴉 鷄鷓 海鳧 鶩丘 稀 跋踵 潔鈎 烏溪 酸興 螢鼠 鴨  
 鳩 勝遇 鷓 大鷓 鴉 鶩 (一名比翼) 鸛 鶴 鸛雀 鸞  
 鷹 鳧 鸛鷓 鶩 鴉 鷓 白鷺 世樂 鷄 雉 鳥 鶩 鶩  
 鷓 胡 鷓 雀 鶩 鴉 鴉 鷓 鸛 鸛 反舌 載鳴 鷹 鳩 鶩  
 鷓 鼻 蟬 蠅 蟻 蜂 胡蝶 蜂 螻 蝦 魚 龜 虺 蟹 虫  
 蜘蛛 蝗 蚯蚓 蟻 螻 蛄 蝦 蟆 射妖

第十八 禽惣載

鳳皇 發明 焦明 鸛鶴 幽昌 鸞 吉利鳥 富貴鳥 鸞鸞 商  
 鴉 鷄鷓 海鳧 鶩丘 號 跋踵 潔鈎 烏溪 酸興 螢鼠 鴨  
 鳩 勝遇 鷓 大鷓 鴉 鶩 (一名比翼) 鸛 鶴 鸛雀 鸞  
 雁 鳧 鸛鷓 鶩 鴉 鷓 白鷺 世樂 鷄 雉 鳥 鶩 鶩  
 鷓 鷓 鷓 雀 鶩 鴉 鴉 鷓 鸛 鸛 反舌 戴 鶩 鷹 鳩 鶩  
 鷓 鼻 蟬 蠅 蟻 蜂 胡蝶 蜂 螻 蝦 魚 龜 虺 蟹 虫  
 蜘蛛 蝗 蚯蚓 蟻 螻 蛄 蝦 蟆 射妖

第十八 禽惣載

鳳皇 發明 焦明 鸛鶴 幽昌 鸞 吉利鳥 富貴鳥 鸞鸞 商

19 ①

第十九 獸惣載

鴉 鷄鷓 海鳧 鶩丘 號 跋踵 潔鈎 烏溪 酸興 螢鼠 鴨  
 鳩 勝遇 鷓 大鷓 鴉 鶩 (一名比翼) 鸛 鶴 鸛雀 鸞  
 鷹 鳧 鸛鷓 鶩 鴉 鷓 白鷺 世樂 鷄 雉 鳥 鶩 鶩  
 鷓 胡 鷓 雀 鶩 鴉 鴉 鷓 鸛 鸛 反舌 載鳴 鷹 鳩 鶩  
 鷓 鼻 蟬 蠅 蟻 蜂 胡蝶 蜂 螻 蝦 魚 龜 虺 蟹 虫  
 蜘蛛 蝗 蚯蚓 蟻 螻 蛄 蝦 蟆 射妖

第十九 獸惣載

麒麟 象 馬 牛 羊 犬 虎 狼 熊 猪 麋 麋 麋 麋  
 鹿 麋 駿牙 狐 菟 猿 狸 獺 犀 解豸 兪 白澤  
 狡 比肩 周巾 角端 狸力 長舌 猾 朱厭 玃 朱儒 蜚  
 蝮 鼠 (服翼附見) 龍 蛇 蛟 螭

第十九 獸惣載

麒麟 象 馬 牛 羊 犬 虎 狼 熊 猪 麋 麋 麋 麋

鹿 麋 駿牙 狐 菟 猿 狸 獺 獺 犀 解豸 兕 白澤  
 狡 比肩 周巾 角端 狸力 長舌 猾 朱厭 玃 朱儒 蜚  
 蝮 鼠（服翼附見す） 龍 蛇 蛟 螭

21 ①②③  
 天地瑞祥志 第一

20 ①

第廿 祭惣載

封禪 郊 祭日月 迎氣 巡狩 社稷 宗廟（拜墓附見） 藉田  
 〈禁附見〉 靈星 三司 明堂 五祀 高禘 祭風雨 雩 祭水  
 禘 儺 祭馬 治兵 祭向神 祭鼓磨 盟誓 振旅 樂祭 祭日  
 遭事

20 ②

第廿 祭惣載

封禪 郊 祭日月 迎氣 巡狩 社稷 宗廟（拜墓附見） 藉田  
 〈蠶附見〉 靈星 三司 明堂 五祀 高禘 祭風雨 雩 祭水  
 禘 儺 祭馬 治兵 祭向神 祭鼓磨 盟誓 振旅 樂祭 祭日  
 遭事

20 ③

第廿 祭惣載

封禪 郊 祭日月 迎氣 巡狩 社稷 宗廟（拜墓附見す） 藉  
 田（蠶附見す） 靈星 三司 明堂 五祀 高禘 祭風雨 雩  
 祭水 禘 儺 祭馬 治兵 祭向神 祭鼓磨 盟誓 振旅 樂祭  
 祭日遭事

（水口幹記）

【付記一】本稿は、本誌九三号（前号）に掲載した「京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』翻刻・校注―「第一」の翻刻と校注（一）―」の続編である。『天地瑞祥志』概説及び凡例については、前稿を参照願いたい。また、「第十四」の翻刻・校注である佐野誠子・佐々木聡「京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』第十四翻刻・校注」（『名古屋大学中国語学文学論集』第二九輯、二〇一五年）が刊行されている。併せて参照いただきたい。

【付記二】本書の翻刻を許可して下さった京都大学人文科学研究所と同研究所の武田時昌教授に記して謝意を示したい。

（みずぐちもとぎ／本学准教授）  
 〈たなかよしあきら／大東文化大学東洋研究所講師〉